

< 翻 訳 >

## 叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXVIII)<sup>1</sup>—

茂木 秀 淳 信州大学教育学部社会科学教育講座

キーワード： ヴリトラ殺し, パラモン殺し, ヴィシュヌ信仰, サマンガ仙, ナーラダ仙

[273 章] (D.282 章, C.110143(10150)-10207, K.288 章) (承前)

- (7) その極めて大きな威力をもち、「時の火」に匹敵する<sup>2</sup>金剛杵は、瞬時に大身体のダイトヤ、ヴリトラを倒した。
- (8) するとヴリトラが殺されたのを見て、再び至る所で神々の歓声が起こったのである、パーラタ族の雄牛よ。
- (9) ヴリトラを殺した後、ダーナヴァの敵、偉大な栄光をもつ至尊者インドラは<sup>3</sup>、ヴィシュヌ神の入った金剛杵をもって (cf.MBh.XII.272.31) 天に昇った。
- (10) するとその時、クル族の子孫よ、大変恐ろしい、獯猛で、世間に恐怖をもたらす「パラモン殺し」が<sup>4</sup>ヴリトラの身体から出たのであった。<sup>5</sup>
- (11) それは、恐ろしい歯を持ち、恐ろしく、醜く、暗褐色の皮膚をもち、頭髪乱れ、恐ろしい眼をしており、パーラタ族よ、
- (12) 骸骨を首飾りとし、痩せて<sup>6</sup>、血まみれで、ボロの衣を着ていた<sup>7</sup>、パーラタ族の雄牛よ、ダルマを知る者よ。(Cf.Hopkins, *Epic Mythology*, p.129.49)
- (13) すぐれた王よ、そのような姿をして恐怖をもたらすその女は、(ヴリトラより)外に出てから、金剛杵を持つインドラを探し求めたのである、パーラタ族のすぐれた者よ。
- (14) それからしばらくして、ヴリトラの殺害者(インドラ)は、クル族の称賛すべき者よ、世間の人々の安寧のために、天界に向かって進んでいた。

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXVII)—』(信州大学教育学部研究論集第1号 pp.151-164, 2009年7月)に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いる主なものは以下のとおりである。

• Hopkins[1902]: E.W.Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS vol.23, 1902, pp.109-155.

<sup>2</sup>P.,D.: kālāgnisadr̥ṣopamaḥ K. kālāntakayamopamaḥ Deussen: dem Todesfeuer an Ähnlichkeit vergleichbar Ganguli: the fire that destroys the creation at the end of the Yuga

<sup>3</sup>P. bhagavān D.,K.: maghavā

<sup>4</sup>P.,K.: brahmahatyā D. brahmavadhyā 以下, P. は brahmahatyā, D. と K. は brahmavadhyā をそれぞれ用いている。

<sup>5</sup>Hopkins, *Epic Mythology*, p.129.46-47: As Vṛtra's of Brahmanic family, his slaughter is regarded as "priest-murder"

<sup>6</sup>P. kṛṣā ca D.,K.: kṛtyeva

<sup>7</sup>P. cīrastraivāsini D.,K.: cīravalkalavāsini

- (15) しかし、(バラモン殺しは) 大力のインドラが蓮の茎から (bisāt) 出て行こうとするのを<sup>8</sup>見て、神々の王(インドラ)の首をつかんで<sup>9</sup>、しっかりとしがみついた。
- (16) しかし、かのインドラは、バラモン殺しから生じた恐怖に満たされたので、蓮の茎の中に隠れ (bisamadhyastha)、長い年月蓮の中に留まった<sup>10</sup>。
- (17) しかし、かのバラモン殺しは、力を尽くして、彼を追ったので、(インドラは) 捕まえられて、クル族の子孫よ、動けなくなった<sup>11</sup>。
- (18) インドラは、それを振り払おうと、全力で努力した。しかし神々の王(インドラ)は、バラモン殺しを振り払うことができなかった。
- (19) その女に捕まえられた神々の王インドラは、パーラタ族の雄牛よ、父祖に近づいて、頭を下げて (śirasā) 敬礼した。
- (20) インドラが、最高の再生族(ヴリトラ)を殺したために<sup>12</sup>捕まえられたのを知って、(父祖) プラフマー神は考えた、すぐれたパーラタ族よ。
- (21) 長い腕をもつ者よ、父祖はそのバラモン殺しに優しい声で慰めるかのように言ったのである、パーラタ族よ (cf.MBh.XII.273.41)。
- (22) この三十(柱の神々)の王を、解き放つべし、美しい者よ<sup>13</sup>、余のためによきことをなすべし。汝のために余は何をすべきか、汝が今ここで望むものは何か、言うがよい。
- バラモン殺しは言った。
- (23) 三界で敬われた、三界の創造者たる神が(私に)好意的であるので、思うに、(私の望みは)ここで達成されました<sup>14</sup>。私に(他の)住む場所を定めて下さい。
- (24) 神よ、世界の保護を意図するあなたによってこの(バラモン殺すべからずの)規範 (maryādā)<sup>15</sup>は作られ、あなたによって確立され、広く導入されました。
- (25) ダルマを知る方よ、あらゆる世界の主であるあなたが喜ぶのであれば、主よ、私はインドラから離れます。しかし私に住む場所をお定め下さい<sup>16</sup>。

<sup>8</sup>P. bisān niḥsaramāṇaṃ tu D.,K.: sā viniḥsaramāṇaṃ tu なぜここに bisāt があるのかわかりにくい。次の第16詩節に、インドラはバラモン殺しからうけた恐怖のために蓮の茎に隠れたが、それでもバラモン殺しはインドラを追いかけて捕まえたとあるので、インドラがバラモン殺しに会う以前に蓮の茎の中にいる理由はない。D.,K.ならば、「インドラが(天界へと)行こうとするのをバラモン殺しが見て」の意味なので文脈に即している。(Cf.Hopkins, Epic Mythology, p.130.38-39)

<sup>9</sup>P.,K.: kaṅṭhe jagrāha D. jagrāha vadhyā

<sup>10</sup>P. babhūvābdagaṇān bahūn D.,K.: uvāsābdagaṇān bahūn

<sup>11</sup>P. niśceṣṭaḥ D.,K.: nistejasāḥ

<sup>12</sup>P. dvijapraravahatyayā D.,K.: dvijapraravahadyayā

<sup>13</sup>P.,K.: bhāmini D. bhāvini

<sup>14</sup>P. kṛtam eveha manye 'haṃ D.,K.: kṛtam eva hi manyāmi

<sup>15</sup>maryādā Deussen: diese Bestimmung [keinen Brahmanen zu töten]

<sup>16</sup>P. tu vidhatsva me D.,K.: saṃvidhatsva me D.,K. は第23詩節と同じ表現の繰り返しを避けたか。

ビーシュマは言った。

(26) すると、祖父は、バラモン殺しに「そうしよう」と言った。彼は、首尾よく (upāyatas), バラモン殺しをインドラから離れた<sup>17</sup>。

(27) そしてそれから偉大な自存者 (ブラフマー神) によって、火が瞑想 (によって創造) された。そして (火は) ブラフマー神に近づいて、次のような言葉を発した。

(28) 尊者よ、神よ、敵を調伏する者よ<sup>18</sup>、私は貴方の前におります。私は何をなすべきか、尊者はお話下さい。

ブラフマー神は言った。

(29) 余は、インドラを解き放つために<sup>19</sup>今このバラモン殺しを細かく切り分けるであろう。汝はその四分の一を余から受け取るべし。

アグニ神は言った。

(30) 私はどうすれば (このバラモン殺しから) 最終的に解放されるのですか。ブラフマー神よ、それを考えて下さい、主よ。それを私は、正しく知ることを望みます、世界で敬われる方よ。

ブラフマー神は言った。

(31) ある時、暗闇に覆われた者が、燃えている汝に近づいて、自分から (svayaṃ) 穀粒と薬草と果汁 (rasa) を火の中に祭らないならば、

(32) このバラモン殺しはすぐにその者のもとへ行き、その者の中に住むであろう。(そうなれば) 供物を運ぶ者よ、汝の心の苦痛は消えるであろう。

ビーシュマは言った。

(33) このように言われて、神と祖霊への供物を享受する聖なる者 (アグニ神) は、祖父のその言葉を受け入れた。そしてそのようになった (=バラモン殺しの四分の一を受け取った) のである、力ある者よ。

(34) それから父祖は、木・薬草・草を呼び寄せて、このことを<sup>20</sup>話し始めたのである、偉大なる王よ<sup>21</sup>。

(35) すると、木と薬草と草は、まったく同じように言われて、火の神と同様に困って、王よ、ブラフマー神に次のように言った。

<sup>17</sup>P.,D.: vyapohata K. vyapohitum

<sup>18</sup>P. arimḍama D.,K.: anindita

<sup>19</sup>P.,K.: śakrasyādya vimokṣārthaṃ D. śakrasyāghavimokṣārthaṃ

<sup>20</sup>imam arthaṃ バラモン殺しの残り四分の三をそれぞれ四分の一づつ取ることか。

<sup>21</sup>K. はこの後に以下の詩節を挿入している。

iyam putrād anuprāptā brahmahatyā mahābhayā /  
puruḥūtaṃ caturthāṃśam asyā yūyaṃ pratīcchata / (cf.MBh.XII.273.49)

- (36) 世界の父祖よ、我々にはバラモン殺しからのどんな最終(的な解放が)あるのですか。本性上打ちのめされている我々を、あなたは再び打ちのめすべきではありません。
- (37) 我々は、常に火に、冷たさに、そして風に動かされた雨に耐えています、神よ。そして、同様に切られたり折られたりするのに<sup>22</sup>(耐えています)。
- (38) (そして)今や、このバラモン殺しを<sup>23</sup>、あなたの指示によって我々は受け取ろうとしています、三界の支配者よ。あなたは、(バラモン殺しからの我々の)解放を考えてください。

ブラフマー神は言った。

- (39) 満月と新月の時に (parvakāle tu samprāpte, cf.MBh.III.246.18), 人が迷盲のために(汝らを)切ったり折ったりするならば、その人にこれ(バラモン殺し)は至るであろう。

ビーシュマは言った。

- (40) すると、偉大なブラフマー神によって、そのように言われた木・葉草・草は、ブラフマー神に敬礼して、やって来たように急いで去った。
- (41) それから、世界の父祖たる神ブラフマー神は、アプサラスたちを呼んで、慰めるかのように優しい言葉をかけたのである、バーラタ族よ (cf.MBh.XII.273.21)。
- (42) 美しい手足をもつ者たちよ、これがインドラより生じたバラモン殺しである。余に呼ばれた者たちは (mayoktāḥ Deussen: auf meinen Wunsch), その四分の一の部分を<sup>24</sup>受け取るべし。

アプサラスたちは言った。

- (43) 神の主よ、汝の指示によって、受け入れに意を決した私たちに、必ずや (samayatas), 解放を考えてください、父祖よ。

ブラフマー神は言った。

- (44) 月経時の女と (rajasvalāsau, cf. Pāṇini5.2.112) 交わりをなす者がいれば、これはその者にすぐに向かうであろう。汝らの心の苦痛は消えるべし。

ビーシュマは言った。

- (45) アプサラスの群は、心喜んで、「かしこまりました」と言って、自分たちの場所に達して、歓喜したのである、バーラタ族の雄牛よ。
- (46) それから三界の創造者たる、偉大な熱力をもつ神は再び、水を考えて。瞑想された水もまた、やって来た。

<sup>22</sup>P. chedanabhedanam D.,K.: chedanabhedane

<sup>23</sup>P. brahmahatyām D.,K.: brahmavadhyām

<sup>24</sup>P. asyā bhāgaṃ hi D.,K.: asyā bhāgāṃśaṃ

(47) 彼らすべては集合して、お辞儀をした後、量り知れぬ威力をもつ父祖ブラフマー神に次の言葉を語ったのである、王よ。

(48) 神よ、敵を調伏する者よ、ここにいる我々は、あなたの指示によって、あなたの前にやって来ました。神々の主よ、我々にお命じください、力強き方よ。

ブラフマー神は言った。

(49) これがヴリトラからインドラにとりついた恐ろしいバラモン殺しである。汝ら、この四分の一を受け取るべし。(Cf.Hopkins [1902] p.133, caturthāṃśa)

水神たちは言った。

(50) 世界の主よ、力ある方よ、我々にお命じの通りといたしましょう。必ずや、あなたは我々の(バラモン殺しからの)解放をお考えください。

(51) まさしくあなたは、神々の主よ、あらゆる世界の最高の師であります<sup>25</sup>。この災危から我々を救うこと<sup>26</sup>以外にいかなる恩寵 (prasāda) がありましょう。

ブラフマー神は言った。

(52) 「(汝ら水神は)取るに足らないものだ」と考えて、痰、小便、大便を汝らのところへ出すような、考えの転倒した者 (buddhimohita),

(53) その者にこのバラモン殺しはすぐに行き、そこで住むであろう。かくして汝らの解放が実現する。このことを (iti), 余は汝らに真実として語っている。

ビーシュマは言った。

(54) それからバラモン殺しは<sup>27</sup>, インドラを放して、ユディシュティラよ、神の指示によって割り当てられた通りに<sup>28</sup>, 彼の場所に行った<sup>29</sup>。

(55) 以上がインドラにとりついたバラモン殺しである、人々の王よ。彼(インドラ)は父祖に(去る)許しを求めた後、アシュヴァメーダ祭を行なった。

(56) 偉大な王よ、インドラにとりついたバラモン殺しは、それから馬祠祭 (hayamedha) によって清浄を得たと伝えられている。

(57) (一方)神ヴァーサヴァ(インドラ)は、幸運を得て、もろもろの敵を何度となく打ち砕いて、類なき喜びを得たのである、大地の主よ。

<sup>25</sup>P. paramo guruḥ D.,K.: paramā gatiḥ

<sup>26</sup>P. yaḥ kṛcchrān naḥ D. yan naḥ kṛcchrāt

<sup>27</sup>P. brahmahatyā D.,K.: brahmavadhyā

<sup>28</sup>P. yathānirṣṭam D. yathāvisṣṭam K. yathā nirṣṭam

<sup>29</sup>P. deśam agacchad D.,K.: vāsam agamad

- (58) そして、ヴリトラの血から、プリターの子よ、ククンダが<sup>30</sup>生まれた。それらは、淨身儀礼が済み、熱力に富む再生族によって食べられるべきではない。
- (59) あらゆる所で、汝もまたこれらの再生族にとってよきことをなすべし。何故ならば、これらは神々として地上に広がっているからである、クル族の称賛すべき者よ。
- (60) このように、量り知れない威力をもつ<sup>31</sup>インドラによって、鋭い英知によって (buddhisaukṣmyāt), (正当な) 方策を用いて<sup>32</sup>, 偉大な悪魔ヴリトラは殺されたのである、クル族の子孫よ。
- (61) このように、汝もまた、百の儀式をもち、敵を殺す神と同様、地上において征服されざる者となるであろう、クル族の子孫よ。
- (62) この神聖なインドラの話を節目節目に、賢者の中で語るならば<sup>33</sup>, その人は罪を得ることはないであろう。
- (63) このように、ヴリトラに関連して、インドラの偉大にして驚異的な行為は汝に語られた、息子よ。さらに何を聞こうと望むのか。

[274 章] (D.283 章, C.10208-10271, K.289 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 父祖よ、偉大な英知をもつ者よ、あらゆる聖典に通曉せる者よ、今や、まさしくヴリトラの殺害から<sup>34</sup>私に疑問が生じた。
- (2) 人々の王よ、熱病によって惑乱したヴリトラは、そこで (iha) インドラによって金剛杵を用いて殺された、とあなたは語った、我が罪なき方よ。(Cf.MBh.XII.272.30)
- (3) どうしてこの熱病 (jvara) は生じたのか、またどこから (生じたのか)<sup>35</sup>。熱病の発生を、私は正確に<sup>36</sup>聞きたい、力強き方よ。

ビーシュマは言った。

<sup>30</sup>P. khukhuṇḍāḥ D. śikhāṇḍāḥ K. budbudāḥ Ca. khukhuṇḍāḥ, bahisthachatrākāḥ(sic) (外に生えている茸) / (chatrāka の食禁止規定は Manu S.5.19 に見られる。) Cs. khukhuṇḍāḥ mayūrāḥ — mayūro mecakaḥ kunda khukhuṇḍāḥ palikas tathā — iti madhumatī / (khukhuṇḍāḥは、孔雀である。Madhumatīによれば、mayūra, mecaka, kunda, khukhuṇḍā, palikas は同義語) Deussen (p.508 fn.) Nach P.W. “wohl einebestimmte Pflanze”; Nīlakaṇṭha, Śabdakalpadruma und Vācaspatyam geben keine Hilfe; “high-crested cocks” P.C.Ray; “Hähne” Jacobi. khukhuṇḍā の意味は明確ではないが、茸あるいは孔雀のことと解釈されている。Vṛtra の血が地面に吸収されていることを考えれば、この語によって地面より生じた茸が意図されていると解することは可能であろう。

<sup>31</sup>P. vṛtro 'thāmitatejasā D.,K.: vṛtro hy amitatejasā hi は hiatus breaker か。

<sup>32</sup>upāyapūrvaṃ Deussen: durch Anwendung der rechten Mittel

<sup>33</sup>P. paṭhiṣyanti D.,K.: vadiṣyanti

<sup>34</sup>P. asti vṛtravadhāḥ eva D. asmin vṛtravadhe deva K. asmin vṛtravadhe tāta

<sup>35</sup>P. prādur abhūt kutah D. prādur babhau kutah K. prādur babhūva ha P. は aorist D.,K. は perfect, D. は語根が bhā.

<sup>36</sup>nipuṇataḥ Ca. nipuṇataḥ, bhāvapradhāno nirdeśaḥ / naipuṇyād ity arthaḥ / (nipuṇataḥとは、事実を主とした教示である。「正確に」という意味である。)

- (4) 王よ、世間周知の熱病のこの世における<sup>37</sup>誕生を聞くべし。それについて詳細に、またあるがままに語るであろう、パーラタ族よ。
- (5) 偉大な王よ、かつてメール山の山頂は、ジュヨーティシユカ (光り輝く) という名で三界によく知られていた。それは、サーヴィトリ神が住み<sup>38</sup>、あらゆる財宝によって飾られ、(高さは) 量り知れず、全世界の中で征服されざるものであった、パーラタ族よ。
- (6) (シヴァ) 神は、金や貴石 (hemadhātu) で飾られたその山腹に、臥床 (paryāṅka) に横たわることがとくして、輝きつつ座っていた。
- (7) 山の王の娘も、常にこの (神の) 近くにいた。そして偉大な神々、大精力のヴァスたちも<sup>39</sup>(近くにいた)。
- (8) そして、医師の中ですぐれた者である偉大なアシュヴィン双神、そしてグヒヤカたちに囲まれた王であり、
- (9) ヤクシャの王にして、吉祥にしてカイラーサを住処とする主クペーラがいた<sup>40</sup>。(cf.Hopkins, Epic Mythology, pp.142-149) そして、アンギラスを長とする他の神仙たち、
- (10) そしてガンダルヴァの (長) ヴィシュヴァーヴァス、ナーラダ仙とパルヴァタ仙、アプサラスの群の集団が多数集まっていた。
- (11) めでたく心地よい、様々な香りを運ぶ清浄な風が吹き、大きな木々は<sup>41</sup>、あらゆる季節の花を身にまとい、花を開いていた。
- (12) そして、ヴィドヤーダラと熱力に富むシッタたちが、偉大な神、獣主シヴァ神を囲んでいた、パーラタ族よ。
- (13) そして、偉大な王よ、様々な姿をしたブータ、極めて獐猛な羅刹、大力のピシャーチャは、
- (14) 様々な姿をし、様々な武器を手にして、神の臣下として、歓喜して、火のように (力強く) そこに立っていた。

<sup>37</sup>P. jvarasyeha D.,K.: jvaram imaṃ

<sup>38</sup>sāvitrāṃ Ca. sāvitrādhiṣṭhitam / (sāvitrām とは、サーヴィトリ神が住む、という意味である) あるいは「太陽に届く程高い」の意味か。

<sup>39</sup>P. vasavaś ca mahaujaśaḥ D.,K.: vasavaś cāmitaijaśaḥ

<sup>40</sup>この後に、K. は以下の三行、D. は後の二行を挿入している。

śaṅkha-padmanidhibyāṃ ca lakṣmīyā paramayā saha /

upāsanta mahātmānam uśanā ca mahākaviḥ /

sanat-kumārāpramukhās tathaiva ca maharṣayaḥ / (cf. Vāyu Purāṇa 1.30.85)

<sup>41</sup>P. mahādramāḥ D.,K.: drumās tathā

- (15) 聖なるナンディンは、自らの光輝で輝く燃える槍を取って、そこに(臣下のところに)神の同意を得て立っていた。
- (16) 川の中で最もすぐれ、あらゆる渡し場に水を供給する美しいガンガー女神も、その神に仕えたのである、クル族の称賛すべき者よ。
- (17) このように、かの至尊なる偉大な神は、神仙によって、そして、大きな幸運をもつ<sup>42</sup>神々によって礼拝されつつ、そこに留まっていた。
- (18) そして、ある時、ダクシャという名の造物主が、古くからの規定に則って祭式を行なうことにした(? yakṣyamāṇo 'nvapadyata)。
- (19) そこで、あらゆる神々は、集まって、インドラを先頭にして、その祭式に行くことに一致した。(Cf. Vāyu Purāṇa I.30.95)
- (20) これら偉大な輝く姿をもつ<sup>43</sup>神々は、輝く天の乗物に乗って、シヴァ神の許可の下に、「ガンガーの門」に行った、と伝えられている。(Cf. Vāyu Purāṇa I.30.96)
- (21) その時、山の王の娘である善き女神は、神々が出発したのを見た後、獣主であり夫であるシヴァ神に言葉をかけた。
- (22) 「尊者よ、これらの神々は、インドラを先頭にして一体どこへ行くのですか。真理を知る方よ、正しくお話下さい。これが私の大きな疑問です。」

マヘーシュヴァラは言った。

- (23) 大きな幸運をもつ者よ、ダクシャという名の、最高の生き物の主が、馬祠祭(hayamedha)によって供儀を行なうのである。天に住む者たちはそこに行こうとしているのである。

ウマーは言った。

- (24) 大きな幸運をもつ方よ、貴方はどうしてその祭式に行かないのですか<sup>44</sup>。あるいは何らかの禁止のために、行かないのですか。

マヘーシュヴァラは言った。

- (25) 大きな幸運をもつ者よ、神々のみによって、すべてこのように<sup>45</sup>取り決められたのである。すなわち「あらゆる祭式において、私の取り分(bhāga)は用意されない」と。
- (26) かつての方策によって生じた習慣(mārga)に従って、美しい女よ、神々は、規定通り私に祭式の取り分を与えないのである。

<sup>42</sup>P. sumahābhāgair D.,K.: sumahātejā

<sup>43</sup>P. jvalitair jvalanaprabhāḥ D.,K.: jvalanārkasamaprabhaiḥ

<sup>44</sup>P. nābhigacchasi D. nādhigacchasi K. nādhigacchati

<sup>45</sup>P. sarvam etad D.,K.: pūrvam etad



ウマーは言った。

- (27) 尊者よ、あなたはあらゆる生き物の中で、もろもろの徳性によって威光すぐれ、そして、光輝によっても、名声によっても、めでたさによっても、(他の生き物に)負けることはなく、凌がれることもありません<sup>46</sup>。
- (28) 大きな幸運をもつ方よ、このようなあなたに対する取り分の否定によって、私には非なる苦痛が生じました、また震え (vepathu) も (生じました)、我が罪なき方よ。

ビーシュマは言った。

- (29) このように、かの女神は、獣主であり夫である神に言った後、心は (怒りで) 燃えつつも<sup>47</sup>、沈黙したのである、王よ。
- (30) その時、女神の心にある目的を持つ考えがあるのを知って、シヴァ神はナンディンに「汝は、留まるべし」と命じた。
- (31) そして、あらゆるヨーガの自在者の自在者であり、非常に大きな光輝をもち、神の神たるピナーカ弓を持つ者は、ヨーガの力 (超能力 yogabala) を発揮し、恐ろしい従者を率いて、その祭式をただちに破壊した。
- (32) (従者の) ある者は、大音声を発し、またある者は、大笑いをした。さらに他の者は、血を (祭式の) 火に撒き散らしたのである、王よ。
- (33) ある者は、祭柱を引き抜き、すさまじい形相をして歩き廻った<sup>48</sup>。そして他の者は、口で召使たちを呑み込んだ。
- (34) その時、人々の王よ、その祭式は、完全に破壊されそうになったので、鹿の姿をとって空中に飛び上がった。
- (35) 祭式がそのような姿で行くのを見て、かの主は、弓と矢をとって、追いかけた。
- (36) するとその量り知れない威力 (tejas) をもつ神々の主の怒りによって、額から恐ろしい汗の一滴が生じた。
- (37) その汗の一滴が地上に落ちた瞬間、(世界の帰滅の) 時の火 (kālanala) のごとき、大火が生じた。
- (38) するとそこに、人の雄牛よ、異様に赤い眼をもち<sup>49</sup>、赤茶けた (hari) 髭をはやした恐ろしそうな小人が生じた。

<sup>46</sup>P. ajeyaś cāpradhṛṣyaś ca D.,K.: ajayyaś cāpy adhrṣyaś ca

<sup>47</sup>dahyamānena cetasā Absolute Instrumental か。

<sup>48</sup>P.,D.: babhramur vikṛtānanāḥ K. vyākṣīpan vikṛtānanāḥ

<sup>49</sup>P. hrasvo 'timātrarakṭākṣo D.,K.: hrasvo 'timātram raktākṣo (Cf.Hopkins [1902] p.140, fn.2: *hrasvo 'timātram* ("excessively short"))

- (39) その者は、髭を逆だて、体は深く毛で覆われ、鷹や梟のごとくであり(?)<sup>50</sup>、恐ろしい容貌で色黒く<sup>51</sup>、赤い着物を着ていた。
- (40) その大力の者が(mahāsattva)、その(鹿の姿となった)祭式を、火が枯木を焼くかのごとくに、焼いた<sup>52</sup>。そしてすべての神々もまた、それを(tato)恐れて十方に逃げた。
- (41) その男がそこを攻撃すると<sup>53</sup>、人々の主よ、大地は大きく震動したのである、王よ、パーラタ族の雄牛よ。
- (42) 世界を恐れさせる苦痛の音が発せられると<sup>54</sup>、祖父は、偉大な神(シヴァ神)のところに現われて、語った。
- (43) あらゆる神々は、あなたにも取り分を与えるでしょう、主よ。あなたは(怒りの)撤退をなすべし、あらゆる神の支配者よ。
- (44) というのは、これらすべての神々と聖仙たちは、敵を苦しめる方よ、あなたの怒りのために、偉大な神よ、安心することができないからです。
- (45) あなたの汗より生じたこの男は、賢者の中の最上の方よ、「熱病」という名で、世界を歩き廻るでしょう、ダルマを知る方よ。
- (46) これが単一体で存在すると、全大地は支えることができません、威力の主よ。(それ故)これは、多数(に分割して)創造されるべきであります。
- (47) ブラフマー神にそのように言われ、シヴァ神は、取り分にも与ったので、無量の勢力をもつ至尊のブラフマー神に、「そのようにします」と言った。
- (48) ピナーカ弓をもつ者(シヴァ神)は、微笑みつつ、最高の歓喜に達した。そしてその時、ブラフマー神に言われたように、シヴァ神は取り分を得た。
- (49) そして、あらゆるダルマを知る者は、生きとし生ける者の平安のために、熱病を多数(に分割して)創造したのである。それもまた聞くべし、息子よ。

<sup>50</sup>ūrdhvakeśo 'tilomāṅgaḥ śyenolūkas tathaiva このśyenolūka という合成語によって何が描写されようとしているのか明瞭ではない。先行する atilomāṅga(身体あるいは手足が毛で覆われていること)を比喩的に表現したものであろうか。この合成語śyenolūka そのものは、他に(1)「鷹と梟を手にもち」、(2)「鷹梟(という想像上の動物)であり」、(3)「梟に似た鷹のような(?)」、などとも解釈できる。 Deussen: wie bei Habichten oder Eulen Ganguli: like a hawk's or an owl's

<sup>51</sup>P. karālah kṛṣṇavarṇaś ca D.,K.: karālakṛṣṇavarṇaś ca

<sup>52</sup>D.,K. はこの後に以下の句を挿入している。

vyacarat sarvato devān prādravat sa rṣiṃs tathā / (その者は、あらゆる方面から神々を襲い、聖仙もまた攻撃した。)

<sup>53</sup>tena tasmin vicārtā puruṣeṇa Absolute Instrumental の用例か。

<sup>54</sup>P. hāhābhūte pravṛtte tu nāde lokabhayaṃkare D.,K.: hāhābhūtaṃ jagat sarvam upalakṣya tadā prabhuḥ

- (50) 象 (nāga) の頭痛 (?śiṛṣābhitāpa), 山の瀝青 (silājatu), 水の苔<sup>55</sup>, そして蛇の抜けがら<sup>56</sup>(を熱病) と知るべし。
- (51) 牛の爪のひび割れ (?)<sup>57</sup>, 地表の塩土層, ダルマを知る者よ, 家畜の視覚障害,
- (52) 馬の喉の病気<sup>58</sup>, 孔雀の冠毛の分割 (śikhodbheda), コーキラ鳥の眼病, これらが「熱病」であると偉大な(ブラフマー神)によって述べられた。
- (53) あらゆる貝には<sup>59</sup>胆汁の障害がある, と我々は聞いている。またあらゆる鸚鵡のシャックリは<sup>60</sup>「熱病」と言われている。
- (54) そして虎においては, 熱病は疲労であると言われている。しかし, 人においては, ダルマを知る者よ, これは, 熱病の名で知られている<sup>61</sup>。(熱病は)死において, 誕生において, そして中間において, 人に入り込むのである。
- (55) このように, 大自在者の威力は, 熱病という名の大変恐ろしいものである。そして, 自在者は, あらゆる生き物によって崇拜され尊敬されるべきである。
- (56) ダルマの維持者の中ではすぐれたものであるヴリトラは, これ(熱病)に取りつかれて, 口を開けた。するとインドラは, 彼に金剛杵を投げつけた。
- (57) 金剛杵は, ヴリトラの身体に入って<sup>62</sup>, ヴリトラを打ち砕いたのである, パーラタ族よ。金剛杵によって打ち砕かれた, 偉大なヨーギンである偉大な悪魔ヴリトラは, 量り知れない威力をもつヴィシュヌ神の最高の住居に行った。(Cf.J.Gonda, Aspects of Early Viṣṇuism, p.123.3, 17; Vṛtra, a devotee of Viṣṇu; *amitatejas*)
- (58) この世は, かつて, ヴィシュヌ神への誠信のためにヴリトラによって領有されていた (avāptavān)。それ故, 戦いに敗れたヴリトラは, ヴィシュヌ神の住居に至ったのである。
- (59) このように, ヴリトラにまつわる大熱病を, 私は詳細に語った。息子よ, 他に何を汝に語ろう。

<sup>55</sup>apām tu nīlikā N. nīlikā śaivālam /

<sup>56</sup>nirmokaṃ bhujageṣu Ca. nirmokaṃ nāma dr̥ṣṭipratyavarodhanaṃ kiyatā kālena bhujaga śarīrāt pṛthagbhavati / (「抜けがら」とは, 視覚障害であり (?), ある期間すぎると, 蛇の体から分離するのである)

<sup>57</sup>khoraḥ saurabheyāṇām Ca. saurabheyāṇām, gavām / khoraḥ nīlikāparaparyāyah / (苔の悪化した状態が khoraka) Cn. khoraḥ paśūnām pādarogaḥ / (khoraḥ とは, 牛の足の病気) Cs. khoraḥ, khurarogaḥ / (khoraḥ とは蹄の病気)

<sup>58</sup>randhrāgatam Cn., Cp.: randhrāgatam, aśvagalarandhragatam māṃsakaṇḍam / (randhrāgata とは, 馬の咽喉の孔口にある肉片)

<sup>59</sup>P. abjānām D., K.: avīnām

<sup>60</sup>hikkikā Cv. hikkikā, kṣaṇe kṣaṇe malam / (hikkikā とは, 瞬間瞬間の分泌物)

<sup>61</sup>P., K. jvaro nāmaīṣa viśrutah D. jvaro nāmaīṣa bhārata

<sup>62</sup>P. praviśya vajro vṛtram tu D., K.: praviśya vajram vṛtram ca

- (60) この熱病の誕生を、常に高貴な心を持って、よく注意して語るならば、その人は、病を離れ、安楽にして、歓喜と結びつき、望むままにもろもろの願望をかなえるであろう。(Cf. Vāyu Purāṇa 1.30.303)

[275 章] (D.286 章, C.10532-10552, K.292 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 命ある者は (prāṇin), いつも死の悲しみと苦しみとを恐れている<sup>63</sup> どうすれば私にとって両者がなくなるであろうか、それについて私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (2) ここでも人々はこの古譚を語る。ナーラダ仙とサマンガ仙との対話を、パーラタ族よ。

ナーラダ仙は言った。

- (3) 汝は胸によって挨拶し<sup>64</sup>, 両腕によって (川を) 渡るかの如くである<sup>65</sup>。汝は心満ち足り、いつも悲しみなきように見える。

- (4) 私は今 (iha) 汝に<sup>66</sup>いかなる恐れも、それがどんなに小さな恐れであっても、見ることはない。汝はいつも満足しているかのごとく、元気で (svastha) 子供のように振舞っている<sup>67</sup>。

サマンガ仙は言った。

- (5) 過去, 現在, 未来が, 存在する者における一切である<sup>68</sup>, 誇り高き者よ。それらの真実を (tattvāni) を私は知っている。それ故, 私は消沈 (vimanā) しない。

- (6) 私は, (行為の?) 開始をそしてまた (その) 結果の発生を知っている。世間において (行為の) 結果は様々である。だから私は消沈しない。

<sup>63</sup>P. śokād duḥkhāc ca mṛtyoś ca trasanti D. suduḥkhāc ca sumṛtyoś ca trasante K. śokād duḥkhāc ca mṛtyoś ca trasante

<sup>64</sup>uraseva praṇamase Cn. anye śirasā namanti, tvam tu urasā praṇamase, atyantam vinīto 'sīty arthaḥ / (他の者たちは、頭を下げて挨拶をするが、汝は胸を下げて挨拶をする。汝は、極めてよく教化されている、という意味である) Cp. urasā praṇamase iva, sarvadāntardṛṣṭir ity arthaḥ / (常に内面を見る、という意味である) Cs. urasi hṛdaye praṇamase, prakarṣeṇa nato bhavasi, gambhīra ity arthaḥ / (胸において、とは即ち、心において挨拶する、即ち、大いに身を屈める、という意味である)

<sup>65</sup>bāhubhyāṃ tarasīva Cn. bāhubhyāṃ tarasīva bhavanādīm, atyantasamkate 'pi nirapekṣo 'sīty arthaḥ / (「両腕によって (川を) 渡るかの如く」とは、存在の川を (渡るの) であり、究極の困難においても無関心である、という意味である) Cs. (reading cakṣurbhyāṃ) yathā jalasyopari caran tadantargataṃ na veda tathā cakṣurbhyāṃ viṣayān paśyan na teṣāṃ svarūpaṃ vivecayasīty arthaḥ / (「両眼によって」と読んでいるが、水の上を歩いても、その中にあるものは知らないのと同様に、両眼によって対象を見ても、その本質を見分けることはない、という意味である)

<sup>66</sup>P. neha te D., K.: na hi te

<sup>67</sup>bālavac ca viceṣṭase Cs. bālaviceṣṭanaṃ kvacid api viṣayasaṅgarāhityam / (子供の振舞いは、いつでも対象への執着を欠いている) N. bālavac rāgadveṣaśūnyaḥ / (子供のごとくとは、愛着と嫌悪を欠いている、という意味である)

<sup>68</sup>P. sarvaṃ sattveṣu D. sarvaṃ etat tu K. sarvabhūteṣu

- (7) 知識なき人々、基盤なき人々<sup>69</sup>、裕福な人々(gatimant), ナーラダよ、そして盲目の人々や愚かな人々が生きている。我々もまた(そのように)生きていると見るべし。
- (8) 四肢に病なき神々も、運命によって(vihitena), ある者は力を持ち, ある者は力なく, 生きている。我々も, それと同様に(生きている者として), 尊重すべし(sabhājaya)。
- (9) 千(の資産)をもって生きている者もあり, 百(の資産)をもって生きている者もいる。そして他のある者は野菜(śaka)(を食べること)によって生きている。我々もまた(そのように)生きている者と見るべし。
- (10) もしも我々が悲しまなければ<sup>70</sup>, ナーラダ仙よ, ダルマによることもなく, (祭式などの)行為によることもまったくないであろう<sup>71</sup>。安楽あるいは苦しみが運命に依存している時, どうして(?yat)(それらは人々を)苦しめないであろうか。(vv.10-15 triṣṭubh)
- (11) 人々が, その故に英知(prajñā)と語る<sup>72</sup>英知の根本は, もろもろの感官の明澄(prasāda)である。感官が迷い嘆く時, (そのような)迷乱した感官をもつ者が英知を得ることはない。
- (12) 迷乱した者には高慢が生じ, 高慢はまた迷乱(moha)に他ならない。迷乱した者には, この世もあの世も存在しない。苦というものは常に存在することはなく, 安楽は獲得しても長続きしないものである。
- (13) 存在を本性とするものは変化する。私のように, そのようなものに心騒がせては(samjvara)ならない。望ましい享楽(bhoga)あるいは安楽に執着してはならず, あるいは苦が近づいても(苦と)考えてはならない。
- (14) 完成した者は(samāhita)他者を羨んではならず, また種々の(nānāgataṃ)獲得を喜んでみならない<sup>73</sup>。そしてまた大きな財産の獲得に喜ぶべきではなく, また財産の消失に嘆くべきでもない。

<sup>69</sup>P.,D.: agādhās cāpratiṣṭhās ca K. anārthās cāpratiṣṭhās ca Ca. agādhāḥ anudyamāḥ, apratiṣṭhāḥ vidyādy-abhāvād abaddhamūlāh/(「知識なき人々」とは, 努力をしない人々, 「基盤なき人々」とは, 学問などが無いために, 根が確固としていない人々である) Cn. agādhā nirgranthāḥ mūrkhāḥ, gādhr̥ pratiṣṭhālip̥sayor granthe ceti smṛteḥ / apratiṣṭhāḥ dhānadārādīśūnyāḥ/(「知識なき人々」とは, 経典をもたない(?)愚か者たちである。「知識を」求める(語根 gādh(?))とは, 基盤を獲得しようとする場合, 経典の中において(求める)と伝承されているから(?), 「基盤なき人々」とは, 財産や妻をもたない人々である)

<sup>70</sup>yadā na śocemahi Cn. na śocemahi, śokamūlasyaajñānasyābhāvāt/(悲しみの源である無知が存在しないのだから)

<sup>71</sup>P. kiṃ nu na syād dharmeṇa vā nārada karmaṇā vā D.,K.: kiṃ nu naḥ syād dharmeṇa vā nārada karmaṇā vā 悲しまない, すなわち解脱しているならば, ダルマも祭式も必要ない, という趣旨か。

<sup>72</sup>P. yasmai prajñāṃ kathayante D.,K.: yasmai prajñāḥ kathayante

<sup>73</sup>P. nānāgataṃ nābhinandeta lābham D.,K.: nānāgataṃ cābhinandec ca lābham

- (15) 親族, 財産, 家系<sup>74</sup>, 知識, 真言, 勇猛といったこれらすべては, (人を) 苦から救うことはできない。善行においても, 来世で平安に至ることはない<sup>75</sup>。
- (16) ヨーガを行わない者には (ayuktasya) 覚醒 (buddhi) はない。ヨーガを行なわなければ安楽はない。堅固と<sup>76</sup>苦の棄却とは両者とも我々に安楽をもたらす<sup>77</sup>。
- (17) 愛着は歓喜を引き起こし, 歓喜は自惚れを増大させる。自惚れは地獄へと導く (narakāya)。それ故, 私はそれを<sup>78</sup>完全に捨て去るのである。
- (18) 私は, これら嘆き・恐れ・自惚れを, この世で楽と苦に迷わすものと見る。傍観者の如く。(それらは) この身体を動かすものであるから<sup>79</sup>。
- (19) 富と愛欲を捨て, 憂いなく, 熱情 (jvara) を離れ, 渴愛と迷妄を (tr̥ṣṇāmohau) すべて捨てて, 私はこの地上を歩むのである。
- (20) (私は) 死も, アダルマも, 貪欲も, (その他の) 何事も, この世でもまたあの世でも, まったく畏れることはない。不死の甘露を飲んだ者のごとく。
- (21) 私は, バラモンよ, 大きな揺るぎなき苦行を行なった後, このように認識している。そのため憂いがやって来ても, ナーラダ仙よ, それは私を苦しめることはない。

<sup>74</sup>P. kaulī D.,K.: kaulyaṃ

<sup>75</sup>P. śīle na tu yānti śāntim D.,K.: śīlena tu yānti śāntim 「善行 (śīla)」の評価が P. と D.,K. では反対になる。P. では, 善行は平安の原因ではない。

<sup>76</sup>dhṛtīś ca Cn. dhṛtīḥ, manahprāṇendriyakriyāñāṃ stambhasāmarthyam / (「堅固」とは, 心・氣息・感官の行為を停止する能力である)

<sup>77</sup>P. cāpy ubhayaṃ naḥ sukhodayam D.,K.: cety ubhayaṃ tu sukhaṃ nṛpa

<sup>78</sup>P. taṃ D.,K.: tān N. tān priyaharṣotsekān / (「それら」とは, 愛着と歓喜と自惚れである) P. の taṃ は後2者の原因と解される priyam か。

<sup>79</sup>dehasyāsyā viceṣṭanāt Ca. dehasyāsyeti nirdeśo nāhaṃ deha iti niścayapūrvakajñānavibhāvanāya / (「dehasyāsyā」という記述は, 「私は身体ではない」という確信に基づく認識を示すためのものである) Cn. dehasyāsyā, ā asyeti cchedaḥ / asya dehasyā ā viceṣṭanād iti saṃbandhaḥ / (dehasyāsyā は (dehasyā) ā asya と分離される。この身体を動かす限りは, ということである)